仁和寺藏古卷子抄本『黃帝內經太素』に見られる日本的な誤りについて

左合昌美

日本內經醫學會

仁和寺에 소장된 『黃帝內經太素』古卷子抄本의 傳寫過程에 나타난 日本에서의 誤謬에 관하여

左合昌美

日本內經醫學會

唐나라 高宗時代(7世紀後半期)에 流行했던 楊上善이 撰注한 『黃帝內經太素』가 日本에 傳해진 것은 玄宗時代(8世紀前半期)였을 것으로 추측된다. 그 후 『太素』는 中國 宋代에는 이미 거의 모두 流失되었다. 日本에서도 점차 확실하게 傳承되지 못했지만 江戶時代末期에 이르러 京都의 仁和寺 書庫에서 再發見되었다. 따라서 지금 볼 수 있는『太素』에 수록된 내용들은 모두 仁和寺에 저장된 古卷子抄本(以下에서仁和寺本이라고 略称)으로부터 由來해온 것이다. 이 抄本은 1165~1168年에 丹波頼基가 直接 쓴 것이다. 그가 기초로 삼았던 원본은 一世代前의 丹波憲基가 쓴 것이다.

이에 대하여 살펴본 결과, 仁和寺本『太素』의 整理에서 최초에 抄寫할 때 錯誤가 있었다는 것을 考慮할 必要性이 一般古医籍以上으로 크다고 말할 수 있으며, 『素問』, 『靈樞』와의 異同點에 대해서도 校記할 必要가 없는 것을 응당 指摘해내야 한다. 그중 상당한 部分은 옮겨쓴 사람이 일본인이기 때문에 발생한 것이라 할 수 있다. 이런 것들은 日本人에 의하여 校正하는 것이 더 便利하다고 생각된다. 단지 大陸의 文化가 古代日本에 傳入되는 과정에서 古代韓國人의 작용이 컸을 것으로 생각된다. 따라서 『太素』抄本에도「日本的인 錯誤」외에 「古代韓國的인 錯誤」가 있을 가능성도 있다. 今後 이에 대한 많은 연구가 진행되기를 바란다.

唐の高宗の時代(7世紀の後半)に活躍した楊上善[1]の撰注による『黃帝內經太素』が、日本に伝えられたのは玄宗の時代(8世紀の前半)であろう.[2]

* 교신저자 : 정창현, 서울시 동대문구 이문동 경희대학교 한의과대학 원전학교실

1) 楊上善の活躍年代は、太子文學に任ぜられていることや、注中で老子を玄元皇帝ということから、唐の高宗の時代であることがほぼ定說になっている

2) このことは唐制に準じて定められた医學教育に關する最初の法令70年の『大宝律令』を踏襲し71年の『養老律

この後、『太素』は中國では宋代にはすでにほとんど失われ、日本でも次第に伝承が明らかで無くなっていったが、江戸時代の末になって京都の仁和寺の書庫から再發見された．　したがって、今日見ることができるまとまった內容の『太素』は、全て仁和寺藏古卷子抄本(以下では仁和寺本と略称)に由來する．この抄本は直接的には、1165～1168年に丹波頼基が書寫したものであり、そのもとになったのは、一世代前の丹波憲基が書寫したものである.[3]

8世紀の半ばまでに日本に伝來してから、12世紀の半ばに書寫されるまでの間に、どのような経過をたどったかは必ずしも明らかではないが、何度もの轉寫が繰り返されたことは想像できる．中國の著名な文獻學者・錢超塵教授はかつて日本の京都における講演で、「日本人の國民性としての生眞面目さが『太素』の古形の保存に寄与している」という意味の發言をされた．[4] 確かに俗字の保存狀態などをみるとそうした点は實感できるが、何と言っても數百年にわたる轉寫の課程で多量の誤りを發生していることは否めない．その中には、抄者が日本人であることによる限界あるいは特性が見受けられる．その情況について一端を以下に紹介する．

1．語　順

卷3陰陽大論「故壽命無窮與天地終，此聖人之治身也」の楊上善注中に「廣成子語黃帝曰：　吾以目无見所，耳无所聞」云々とある．この「見所」は「所見」とすべきで、日本語では「見る所」と言うことからの誤りである．このことは江戸末期に、『太素』の楊上善注を參考にして『素問』を讀む試みをした多紀元堅の『素問參楊』[5]においてすでに指摘されている．　なお、下の「所聞」は誤ってない．

同じく陰陽大論で、天地陰陽の不全を論ずるところの楊上善注中に「則天地陰陽，　有所不全．人法天地，何取可其全.」とある．この「取可」は「可取」の誤りである．これは日本語で、「取る可き」と言うことに引きずられたものである．

卷22五藏刺「耶在肺，則病皮膚寒熱、上氣、喘、汗出、欬動肩背」の楊上善注に「肺病五有」とある．この「五有」は、日本語で「五つ有る」と言うのに引きずられた誤りで、「有五」とすべきである．下の肝については正しく「肝病有四」とする．これは最も典型的な例であって、漢語では述語(謂語)の後に目的語(賓語)が續くが、日本語では目的語が前にくることによる．

このように、仁和寺本には誤倒の例が甚だ多いが、そのかなり多くの部分が、日本語との語順の違いによると考えられる．

2．同　訓

卷3陰陽大論「故清陽出上竅，　濁陰出下竅」の楊上善注中に「起於中膲，　並有於胃口，　出上膲之後」云々とある．　この「有於」は漢語としては奇怪である．そこで、最近の中國で發行された鉛印本[6]では「行于」としている．しかし、上の文字は中央が少し剝落しかけているとはいえ、明らかに他の箇所で「有」と判斷されている形と同じである．その眞相は「在」とすべきところを、日本語の　「ある」の同訓字「有」と取り違えたものと考えられる.[7]

令』「医疾令」の逸文)に『太素』の書名が無いことと75年に孝謙天皇が發した勅令では、医學生が學ぶべき書物の筆頭にあげられていることによってほぼ確實である

3) 各卷末に、丹波頼基が書寫し終わった年月日が記されており、その書寫の原本に有った丹波憲基が書寫した年月日も轉寫されている．憲基の父と頼基の祖父とが兄弟である

4) 199年の日本鍼灸臨床文獻學會學術大會における特別招待講演の席上での發言

5) 多紀元堅の『素問參楊』オリエント出版社「續黃帝內経古注選集1

6) 王洪図・李雲增補点校『黃帝內経太素』科學技術出版社200

この種の誤りは後々までしばしば見られる．例えば江戸末期に仁和寺本を影抄した人は、巻5陰陽合の「故在上者爲陽」を「故有上者爲陽」と誤ったらしい．

田澤仲舒『泰素後案』8)ではわざわざ指摘して訂正しているが、仁和寺本はやや剝落しているとはいえ、もともと「在」だろう．

この他に日本漢字音が同じであることからきた誤りも有るはずであるが、具体的な適例は見いだしていない．「大」と「太」、「小」と「少」の混用などはそのような印象であるが、これらはもともと古代漢語においては同音であったことが有り9)、直ちに日本的な誤りとは言い難い．

3．模　寫

文字知識の不足から、わからないなりに模寫したのではないかと疑われる箇所が有る．例えば：

巻3陰陽大論「神明之府也」の楊上善注の中に「化陰陽以爲神，通窈冥以忘知」とある．この「窈冥」は様々な考証のすえの判斷であって、實際の文字の形は、上は宀、下は寞である．錢超塵教授は上を穴冠に勿に近いと見て「寂」、下は「冥」と判讀されたが、また「寂冥」という熟語は無いとして、最終的な判斷を保留しておられる.10) そこで私は一時期、寂莫(寂寞)ではないかと考えた．意味上はここのところで問題ない．ただ、底本の下の字形と莫(寞)との差はやや大きい．また、「寂」の音と問題の字形の旁に書かれた反切「烏了反」とは齟齬する．そこで我々の會の荒川緑は「窈冥」と判斷した．『龍龕手鏡』11)で、「窈」の反切は烏了切である．この「窈冥」という熟語は、『太素』の他處にもしばしば見える．荒川説の弱点は、仁和寺本のそこでこの字形を用いてないことくらいである．ただ、穴冠に勿という「窈」の異体字は諸字書に發見できなかった．とは言っても、穴冠に勿というのはそう見えるというだけのことで、それに近い別の字形ということは有りうる．そこで思い至ったのは「幼」の字素(幺と力)が左右に並ぶのではなく、上下に配置された異体字の可能性である．

あらためて問題の文字を擴大して見てみると、ややつぶれた形ながら幺に相当する筆畫が有るようにも見える．また『医心方』12)巻２８玉房指要に出てくる「窈窕」の「窈」の字形もそれに近いことが分かった．これは模寫の精度の問題から發生した紛糾である．

巻１４四時脈診「夏日在膚，沉沉乎萬物有餘」に對して、森立之『素問攷注』は、「沉」ではなく「汎」か、むしろ『素問』の「泛」と考えたほうが良いと言っている．楊上善注の「如水流溢沉沉盛長」からみてもそのほうが相応しいということである．ここの「沉」は底本でも明らかに「沉」である．ところが巻２順養の「腎氣濁沉」の「沉」は沉と書かれる．また、仁和寺本では「凡」は一般に「凡」と書かれ、時には「　」と書かれる．したがって、もとの抄者が「汎」(或いは氵に　)と書いたつもりの文字を、この抄者が見誤って「沉」と書く可能性はかなり高いと思われる．

4．日本獨自の校正符号

巻２調食「血氣與鹹相得則血涘」の楊上善注中に「涘音俟水厓水義當凝也」とある．義釋は『說文』に「涘，　水厓也」とあるから特に問題は無い．「水厓」の下で句讀して、以下を「水義當凝也」として良いのかがいささか不安である．仁

7) 巻２８九宮八風「太一在春分之日在變」も全く同様の例である．この場合は前後の例が「有變」であることからも明らかである

8) オリエント出版社　續東洋医學古典注釋選集２199

9) 王力『同源字典』商務印書館198など

10) 錢超塵『黄帝內経太素研究』人民衛生出版社199

11)『龍龕手鏡』中華書局198. 底本は高麗版影印遼刻本

12) 國宝半井家本『医心方』199年、オリエント出版社影印

和寺本影印の「水」の左には「冫」もしくはカタカナの「ヒ」と見える書き込みが有る．「冫」であればつまり「冰」、「ヒ」であれば問題の字は實は「氷」であって「ヒョウ」(氷の日本漢字音)と讀めという指示かと考えた．『說文』に「冰，水堅也」とあり、「凝」は「冰」の俗と言うから、「氷義當凝也」である可能性は確かに有る．しかしその解釋の對象である「氷」字が前文に見あたらないのは不審である．最近になって、卷１３経筋「治之以馬膏，膏其急者，以白酒和桂，以塗其緩者」の楊上善注中の「急桂酒洩熱故可療緩筋也」の「急」字の左脇にも「ヒ」が有るのを見つけた．江戸末期に仁和寺本の影抄に携わった人は、この符号を抹消の意味に取ったようで、その再抄整理本である喜多村直寛の『黄帝內経太素九卷経纂錄』には「急」字は無い.[13] もし、「ヒ」に見える符号が一般に削去の指示であるとすれば、卷２調食の楊上善注は「涘，音俟，水厓．義當凝也．」で、何の問題も無いことになる．「涘の音は俟で、(もともとの意味は)水厓．ここでの意味は凝のはずである．」[14]

ここで、今年の春に參加した上海における學術研討會[15]での、日中交流の際に沈澍農氏から拝領した『中医古籍用字研究』[16]を繙いてみたところ、「日本の漢字讀音では否と非はどちらもヒと讀み、ヒを用いて削除の意とするのだろう」とあった．これで疑問は氷解したわけである．日本獨自の校正符号と考えられるが、中國の文獻と格闘しているという意識の日本人にはかえって氣づかれず、日本人が書寫した文獻であるという觀点から研究している中國の學者に指摘されたことになる．これは我々にとって、日中學術交流のごく最近のごく具体的な成果の一つと言える．

逆に振り仮名の「ト」を、中國の學者が伝統的な校正符号「ト致」と誤った例は有る.[17]卷２順養「胃中寒腸中熱則脹且洩」の楊上善注中に「以上腸胃俱熱俱寒，此乃胃寒腸熱俱時也」云々とあり、「俱時」の「俱」の脇に「ト」とあるが、これは「トもに」と訓ませたいということに過ぎず、「ト致」などではない．

５．之字の贅用

仁和寺本『太素』には「也之」という漢語としては奇怪な文字の連なりがしばしば見られ、その壓倒的多數は楊上善注の末尾に出現する．錢超塵教授などは、明快に誤りと言いきっておられるが、古代日本史の專門家の中には、同様の例が古代韓國人の漢語ひいてはその影響下にあった古代日本人の漢語においては、さして珍しいことではないという意見も有る．[18]實のところ、中國でも戰國期の竹簡には、その竹簡の右に寄せた「∠」のような形の墨鉤と呼ばれるものが使用され、句讀点や篇章の末尾を表していたらしい[19]ので、必ずしも古代韓國人あるいは古代日本人の漢語の特徴とは言い切れないところも有ろうが、我々の先祖の間ではこれが「之」あるいは「也」字に変形して、長く愛用されたという可能性は言えるだろう．

以上のような情況からみて、仁和寺本『太素』の整理には、そもそも抄寫の誤りを考慮する必要性が、一般の古医籍以上に高いと言えるし、『素問』、『靈樞』との異同についても、校記する必要の無いものを指摘できるはずである．その

13) 前の「水義當凝也」の「水」字については、『黄帝內経太素九纂錄』も削去してない

14) 森立之は、ここの「涘」は、實は「凝」の右旁を省いた俗字だろうと言っている

15) 第七屆全國中医文化与臨床／第十三屆全國医古學術研討會

16) 沈澍農は、南京中医薬大學教授．『中医古籍用字研究』は、の博士學位論文で近々公刊の予定である

17) 范登脉・頼文「蘭陵堂本『太素』誤錄學例」医古文知199年第１期

18) 森浩達『日本書紀の謎を解く』中央公論社・中公新199

19) 淺野裕一・湯淺邦弘編『諸子百家〈再發見〉』岩波書200の附錄

かなりの部分は日本的な誤りと言える．そうしたものはやはり日本人によって正されるのが便利であると考える．ただ、古代日本における大陸からの文化移入には、古代韓國人の力に負うところが多い．したがってまた逆に、『太素』抄本にも「日本的な誤り」の他にあるいは「古代韓國的な誤り」を含んでいる可能性は有ろうかと思われる．今後のご協力ご指導を期待する．